日田市埋蔵文化財調査報告書第61集

祝　原　遺　跡

２００５年

日 田 市 教 育 委 員 会

巻頭写真図版

祝原遺跡全景（北から）

祝原遺跡全景（真上から）

序　　文

平成17年３月22日、日田市・日田郡天瀬町・同大山町・同前津江村・同中津江村・同上津江村の合併をもって、人口約７万７千人、面積約666㎢の新・日田市が第一歩を踏み出しました。

今回報告します祝原遺跡は、この日田市の北西部、日田盆地と福岡県境に挟まれた南北に細長い谷に位置します。大肥川沿いに広がるこの谷では平成９年度より大規模な農業基盤整備事業が行われ、それに伴う遺跡の発掘調査を行ってきました。その結果、この地域が北部九州と日田盆地を結ぶ中継地さながらに、古くから開け栄えてきた土地であることが明らかとなりました。

祝原遺跡はこれら遺跡の中でも最も南の、筑後川との合流点近くで発見された遺跡です。調査では中世の遺物を含む水田跡や、近世と考えられる建物群などが発見され、現在の祝原集落の前身である近世祝原村について知る手がかりを得ることができました。

本書が、これからの文化財保護や地域の歴史の解明、また学術研究や教育現場での資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係者ならびに調査中にさまざまな便宜を図っていただきました調査地周辺の住民の方々、また酷暑の中作業に従事いただきました皆様方に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

平成17年10月31日

日田市教育委員会
教育長　諫　山　康　雄

例　　言

1．本書は、県営圃場整備事業大明地区に伴い日田市教育委員会が平成15年度に実施した祝原遺跡の発掘調査報告書である。

2．大肥地区一帯は古代の条里跡として周知されてきたが、近接する大肥祝原遺跡の調査（平成11年度・Ａ～Ｃ区は報告済）では条里跡は確認されておらず、また大肥祝原遺跡とは小河川で分断されていることから別の遺跡と捉え、区別する意味で「祝原遺跡」とした。

3．調査は県営圃場整備事業大明地区に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。

4．調査にあたっては、大分県日田地方振興局耕地課、日田市経済部農政課（現、日田市農林経済部農政推進課）、大明地区圃場整備組合長森山有男氏の協力を得た。記して感謝申し上げます。

5．調査現場での実測・写真撮影は調査員が行い、一部実測を雅企画有限会社の委託により実施した。また杉森久恵（日田市文化課補助員）の協力を得た。

6．本書に掲載した遺物実測は行時が行い、製図は一部雅企画有限会社の委託によるものを使用した。

7．空中写真撮影は九州航空株式会社に委託し、その成果品を使用した。

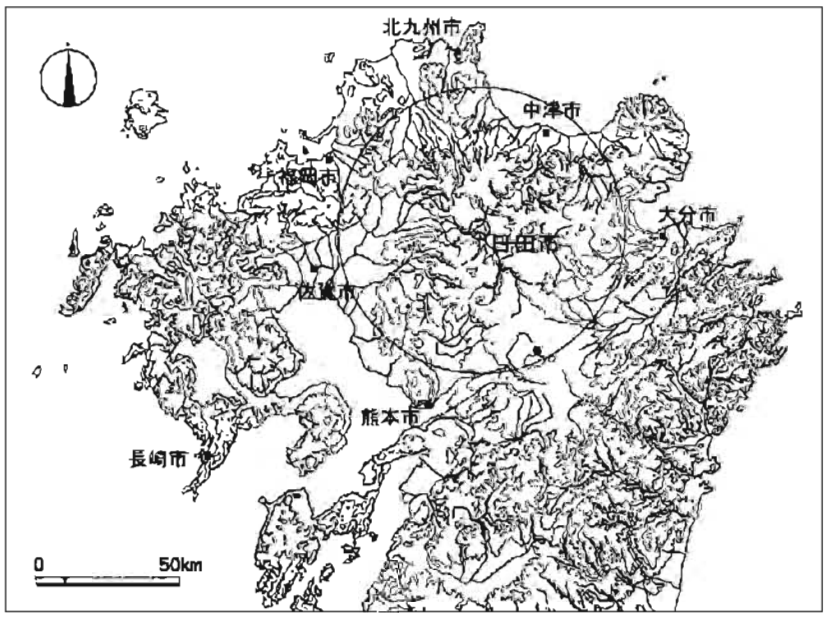
8．掲載した遺物写真は、長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。

9．本書に使用した図面中の方位は、全体図は真北、個別遺構は磁北で表示している。

10．写真図版に付している数字番号は挿図番号に対応する。

11．出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。

12．本書の執筆・編集は行時が担当した。



日田市の位置

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経過と組織 …… 1
　１．調査に至る経過
　２．調査の経過と調査組織

Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 4

Ⅲ．調査の内容 …… 5
　１．調査の概要
　２．調査の内容
　　（１）掘立柱建物
　　（２）土坑
　　（３）樹木倒壊痕
　　（４）水田層
　　（５）縄文包含層
　　（６）その他の出土遺物

Ⅳ．まとめ ……12

写真１　作業風景

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図（1/2,500）…… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/30,000）…… 4
第３図　遺構配置図（1/400）、水田層（1/120）縄文包含層（1/80）土層図… 6
第４図　１・２号掘立柱建物実測図（1/80）…… 7
第５図　３・４号掘立柱建物（1/80）、出土遺物（1/3、1/2）実測図… 8
第６図　１～８号土坑・樹木倒壊痕実測図（1/60）……10
第７図　土坑・ピット・水田層出土遺物実測図（1/3・2/3・1/2）…11

表　目　次

第１表　県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧…… 2
第２表　出土土器観察表　……13
第３表　出土石器観察表　……13

挿　入　写　真　目　次

写真１　作業風景

写　真　図　版　目　次

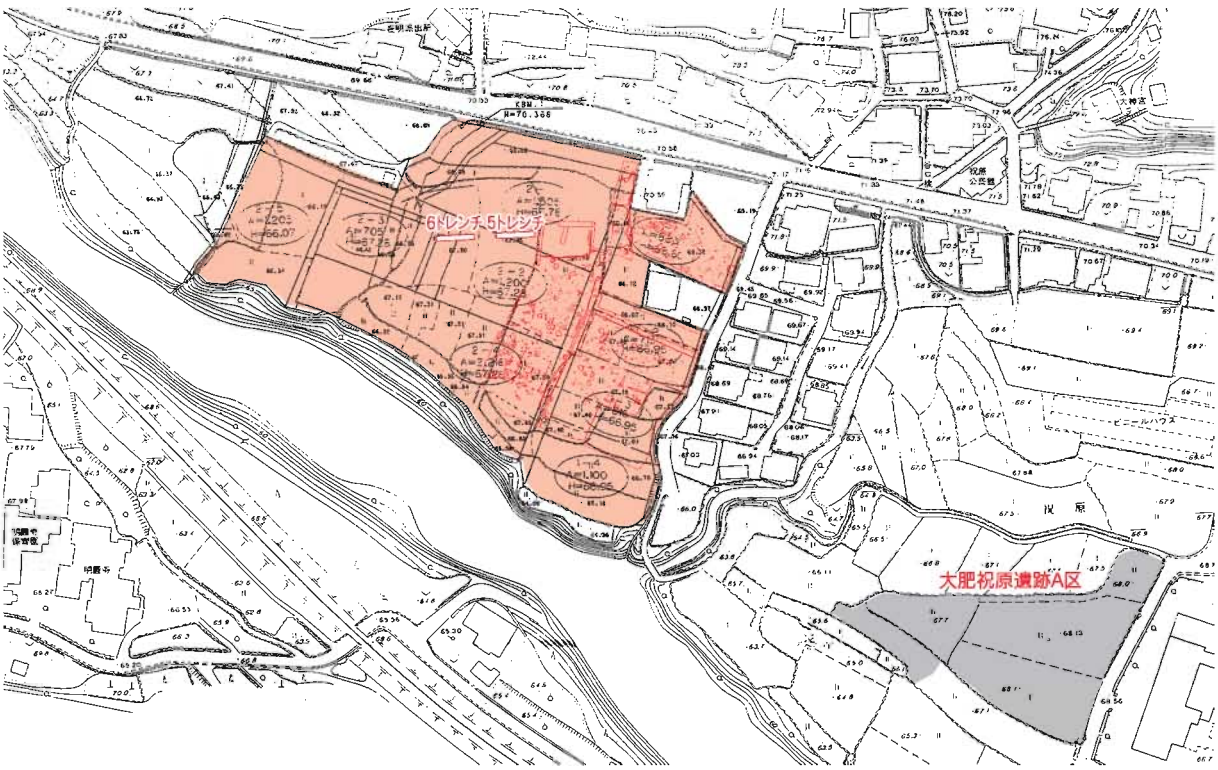
巻頭写真図版　祝原遺跡全景（北から）／祝原遺跡全景（真上から）
写真図版１　１・２・４号掘立柱建物／１号掘立柱建物P11遺物出土状況
３号掘立柱建物／１号土坑／２号土坑
写真図版２　３号土坑／４号土坑／５号土坑／７号土坑／８号土坑
樹木倒壊痕／水田層トレンチ土層
縄文包含層トレンチ土層
写真図版３　出土遺物

Ⅰ　調査に至る経過と組織

１.調査に至る経過

本遺跡の調査は、県営圃場整備事業大明地区（祝原工区）に起因するものである。この県営圃場整備事業大明地区は、日田市西部に所在する大鶴・夜明地区一帯の105ha（最終面積94.2ha）を対象として基盤整備を実施すると同時に、共同営農や農産物加工所の建設、農芸工作物生産団地の実施なども含めたモデル営農団地の創設を目的として、平成９年度より着手された。事前にはこの計画を受けた大分県教育委員会によって対象地一帯が文化財調査を要する地区として判定され、事業主体者である大分県日田地方振興局（以下、県振興局）と市教育委員会（以下、市教委）とで埋蔵文化財の取扱いについて随時協議を行い、試掘調査の結果と工法とを照らし合わせ、遺跡の現状保存が困難である箇所について、平成10年度には大肥中村遺跡、平成11年度には大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡、平成12年度には大肥条里下河内地区、平成12～13年度には大肥吉竹遺跡、平成14年度には大肥遺跡、平成14～15年度には高野遺跡、平成15年度には古屋敷遺跡・祝原遺跡の計９箇所の発掘調査を実施した。各工区における遺跡の調査内容は表1のとおりである。

ここに報告する祝原遺跡に関する取扱いの経過については、平成14年９月30日に高野・古屋敷・白岩工区とともに県振興局から市教委に提出された試掘調査依頼により、同年11月18日～11月28日に試掘調査を実施した。その結果、祝原工区ではいくつかのトレンチで現水田盤土直下や盤下約50cmの深さから柱穴などが検出された。このため、遺構が検出されなかった５・６トレンチを除く区域を調査必要箇所として県振興局耕地課との間で遺跡の取扱いについて協議を行い、工法変更等の検討を依頼したが、遺跡の存在する場所が比高の高い位置であるためそのほとんどが切り土となり、工法の変更は困難であることから、調査対象は第１図に表示する約4,500㎡となった。



第１図　調査区位置図（1/2,500）　※赤トーンは圃場整備範囲

以上の協議結果に基づき、翌平成15年５月１日付けで大分県日田地方振興局と市との間で委託契約を締結し、同６日には埋蔵文化財発掘の通知を大分県教育長あてに提出して調査準備を整え、同９日より発掘調査を開始し、同年８月５日に調査を完了した。整理作業は平成15年９月１日～平成16年１月30日の間実施した。平成16年度には報告書作成にかかわる各種委託を平成16年４月５日～平成17年１月31日の間実施し、平成17年度に報告書の印刷を行った。

２.調査経過と調査組織

祝原遺跡の発掘調査等の経過については、調査日誌に基づき略述する。

５月９日／重機を搬入し、耕作土の除去を行う。

５月19日／重機と作業員による遺構検出に着手。重機を１台追加し、耕作土除去と遺構検出を平行して行う。

５月23日／耕作土除去作業終了により、重機1台搬出する。

６月４日／重機による遺構検出終了により、重機を搬出する。

６月９日／近現代と考えられる撹乱坑を掘り下げる。

６月12日／土坑・樹木倒壊痕・柱穴などの掘り下げに着手。

７月２日／建物柱穴の掘り下げに着手。遺構実測開始。

７月28日／遺構検出面に縄文土器を発見、周辺にトレンチを設定し掘り下げ。

７月31日／水田層トレンチ掘り下げ。

８月２日／空撮。

８月５日／機材撤収をもって調査終了。

第１表　県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧

試掘年度	工区名	試掘結果	時代	処置	遺跡名	発掘調査年度	発掘調査期間	調査面積(㎡)	備　考
平成9年度	嶋田工区	柱穴、包含層	古代・中世	盛土保存	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成9年度	今中工区	なし	－	工事実施	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成9年度	中村工区	住居跡、石棺墓、小児用甕棺墓	弥生時代～中・近世	発掘調査	大肥中村遺跡	平成10年度	98.07.07～98.12.30	10,000	A～C区、概報刊行
平成10年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代～弥生時代	発掘調査	大肥祝原遺跡	平成11年度	99.05.16～00.01.17	5,100	A～D区、うちA～C区は報告済
平成10年度	上村工区	竪穴、溝、土坑、柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	大肥上村遺跡	平成11年度	99.09.28～99.10.29	950	報告済
平成10年度	茶屋ノ瀬工区	竪穴、溝、土坑、柱穴	中世	盛土保存	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成10年度	小鶴工区	竪穴住居、溝、柱穴	弥生時代	盛土保存	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成11年度	鶴河内工区	土坑、柱穴、包含層	縄文時代～中世	発掘調査	大肥条里下河内地区	平成12年度	00.12.04～01.02.28	5,950	未報告
平成11年度	吉竹工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	古墳時代～中世	発掘調査	大肥吉竹遺跡	平成12～13年度	01.01.29～01.05.24	8,270	報告済
平成13年度	大肥工区	竪穴住居、流路、甕棺墓、石棺墓	弥生時代～古墳時代	発掘調査	大肥遺跡	平成14年度	02.05.27～03.02.13	8,200	A～C区、うちA-1区は報告済
平成13年度	竹本工区	なし	－	工事実施	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成14年度	高野工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	高野遺跡	平成14～15年度	03.01.16～03.10.20	9,000	未報告
平成14年度	古屋敷工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代～中世	発掘調査	古屋敷遺跡	平成15年度	03.05.19～03.10.19	7,100	報告済
平成14年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	中・近世	発掘調査	祝原遺跡	平成15年度	03.05.19～03.08.04	4,500	本報告
平成14年度	白岩工区	なし	－	工事実施	－	－	－	－	試掘調査のみ

※網掛けは発掘調査実施遺跡

なお、調査関係者は以下のとおりである（職名は当時のままとしている）。

平成15年度（発掘調査）
調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）（～平成15年７月）
　　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）（平成15年８月～）
調 査 統 括　後藤　清（同文化課長）
調 査 事 務　佐藤　晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）園田恭一郎（同主査）酒井　恵（同主事補）
調　査　員　土居和幸（同主査）若杉竜太（同主事）渡邉隆行（同主事）
調 査 担 当　行時桂子（同主任）
来　訪　者　下村　智（別府大学助教授）
発掘調査員　足立和彦、足立米子、穴井昌生、有冨スマ子、有冨淑子、池田貞夫、石井アヤ子、石井俊政
　　一ノ宮高喜、伊藤智恵子、井上ミチ子、岡部　進、岡部寿美恵、小野忠臣、梶原一二三
　　香月カヨ子、北澤幾子、北向チズ子、熊谷よし子、五反田静子、後藤孝市、財津利枝、財津由太
　　坂本サツキ、佐藤喜代美、高倉厚巳、高倉知子、高倉冨美子、高野　瞳、田中　昇、太郎良開
　　筒井英治、永野節子、原　和義、原　新一、原　寛明、原田寅夫、平原知義、本田早苗
　　堀　英子、三俣松夫、森山文雄、森山征敏、森山八重子、山下アヤ子、和田常次郎
　　渡辺吉之助、渡辺芳五郎
整理作業員　朝倉眞佐子、穴井トヨ子、宇野富子、梶原ヒトエ、黒木千鶴子、田中静香
調査補助員　藤野美音

平成16年度（報告書作成）
調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調 査 統 括　後藤　清（同文化課長）
調 査 事 務　高倉隆人（同文化課長補佐兼埋蔵文化財係長）伊藤京子（同副主幹）中村邦宏（同主事補）
調　査　員　土居和幸（同主査）若杉竜太（同主任）渡邉隆行（同主事）
調 査 担 当　行時桂子（同主任）

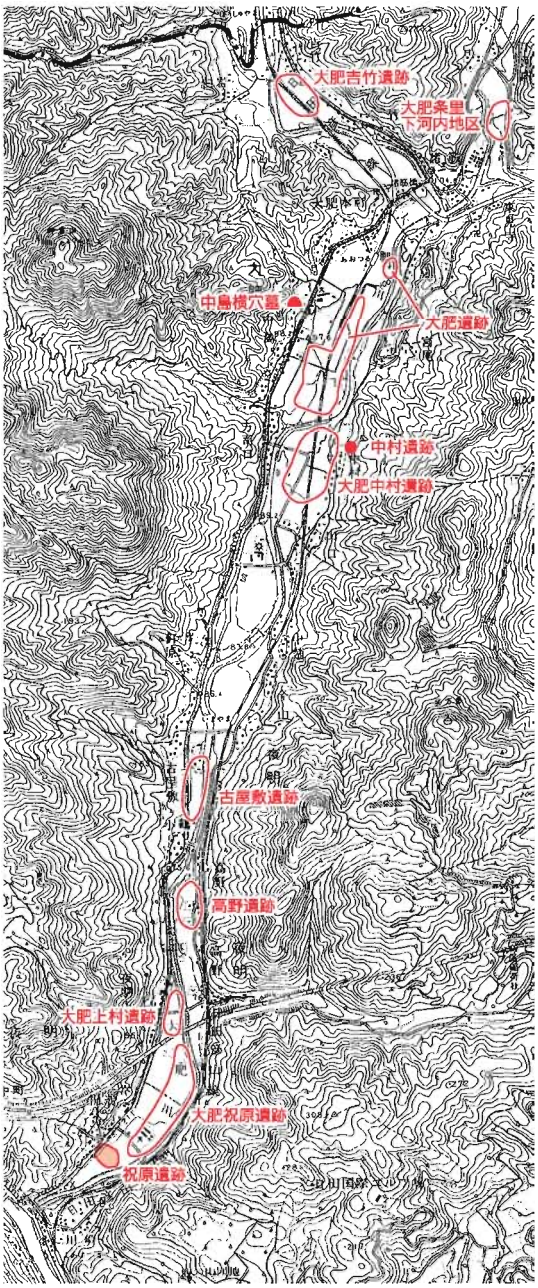
平成17年度（報告書作成・印刷）
調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調 査 統 括　後藤　清（同文化財保護課長）
調 査 事 務　高倉隆人（同文化財保護課長補佐兼埋蔵文化財係長）伊藤京子（同専門員）中村邦宏（同主事補）
調　査　員　土居和幸（同副主幹）今田秀樹（同主任）若杉竜太（同主任）渡邉隆行（同主任）
　　矢羽田幸宏（同主事補）
報告書担当　行時桂子（同主任）

II　遺跡の立地と環境

遺跡は日田盆地の西隣、大肥川沿いに広がる谷の南端に位置する。大肥川は福岡県東峰村皿山を源とし、日田市北端の岳滅鬼山を発する鶴河内川と谷の北部で合流し、南流後日田盆地を東から貫流する三隈川（筑後川）と合流する。今回の調査区は、両河川の合流点からわずか400m上流の、狭隘な河岸段丘上にあたる。

この地域では近年の圃場整備に伴う発掘調査が多く実施され、当地の歴史が明らかにされつつある。川に沿って遺跡を概観すると、まず鶴河内川左岸の大肥条里下河内地区では縄文時代前期の集石が検出されている[1]。大肥川左岸の大肥吉竹遺跡では縄文時代中期の船元式土器が出土したほか、古墳時代後期～奈良時代の集落が確認されている[2]。２河川が合流して約900m下流にある大肥遺跡では、弥生時代前期末～後期の拠点集落・墓地・流路や古墳時代～古代の集落が確認され、特に流路からは三叉鍬などの農具や県内初例となる漆塗木甲など、大量の木製品が出土している[3]。対岸の大肥中村遺跡では、弥生時代中期～後期の墳墓群や古墳時代～近世の集落が検出され、中世～近世では鍛冶遺構も見つかっている[4]。大肥川流域では古墳は未発見であるが、大肥遺跡の西側丘陵裾部には中島横穴墓が[5]、また大肥中村遺跡の東側丘陵上には工事時に箱式石棺墓が出土した中村遺跡があり[6]、周辺山裾部に当該期の墳墓が存在する可能性がある。大肥中村遺跡から約1.8km下流の古屋敷遺跡では、縄文時代前期の包含層と中世の建物群が見つかり[7]、左岸の高野遺跡では、弥生時代中期～後期の大集落と中世の建物群が確認されている[8]。大肥上村遺跡・大肥祝原遺跡Ａ～Ｃ区では弥生時代中期～後期の集落跡が[9]、大肥祝原遺跡Ｄ区では縄文時代後期～晩期の大量の土器と集石が見つかっている[10]。

このように、この谷は水陸共に交通の要所であった日田の西の玄関として古くから重要な位置を占めた地域であったことを、遺跡から窺い知ることができる。



第２図　周辺遺跡分布図（1/30,000）

【註】

（1）行時志郎「大肥条里下河内地区」『平成12年度(2000年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会　2001

（2）渡邉隆行『大肥吉竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第48集　日田市教育委員会　2004

（3）渡邉隆行『大肥遺跡Ⅰ－A-1区の調査の記録－』日田市埋蔵文化財調査報告書第50集　日田市教育委員会　2004
渡邉隆行「大肥条里大肥地区」『平成14年度(2002年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会　2003

（4）行時志郎『大肥中村遺跡－発掘調査概報－』 日田市教育委員会　2003

（5）横穴の開口が確認されている。

（6）『日田市史』 日田市　1990

（7）渡邉隆行『古屋敷遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第56集　日田市教育委員会　2004

（8）若杉竜太「高野遺跡」『平成15年度(2003年度)日田市埋蔵文化財年報』　日田市教育委員会　2004

（9）若杉竜太『大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第45集　日田市教育委員会　2003

(10)若杉竜太「大肥条里祝原地区」『平成11年度(1999年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会　2001

III　調査の内容

１.調査の概要（第３図）

調査では、現在の水田盤土直下より掘立柱建物４棟、土坑８基、樹木倒壊痕１基、水田層、縄文包含層が検出された。北200mに近接する大肥祝原遺跡Ａ区との関連性は明らかでない。以下、遺構ごとに説明を加える。

２.遺構と遺物（第４～６図）

（1）掘立柱建物

建物は調査区北側のやや高い位置で１棟、調査区南側で３棟検出された。南側の３棟は主軸をそろえ、うち２棟はわずかな間隔をあけて東西に並んでいる。

１号掘立柱建物（第4図）

調査区南側で確認された建物である。身舎の規模は梁間２間（約4.3m）、桁行４間（約9.0m）を測り、梁間方向の柱間平均は約2.2m、桁行方向の柱間平均は約2.3mである。延床面積は約39.5㎡で、建物の軸方位はN-50°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは40～70cmを測り、深さは20～80cmとばらつきがあるものの深くしっかりしており、礫の入った柱穴も見られる。P11床面から火入（第５図－11）が出土した。

２号掘立柱建物（第４図）

１号掘立柱建物の東隣で確認された建物である。身舎の規模は梁間２間（約4.9m）、桁行４間（約8.9m）を測り、梁間方向の柱間平均は約2.4m、桁行方向の柱間平均は約2.2mである。延床面積は約44.0㎡で、建物の軸方位はN-50°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは40～80cmを測り、深さは60～80cmと深くしっかりしており、ほぼ全ての柱穴内に、抜柱後の穴埋めのような状態で大小の礫が見られた。柱穴からは擂鉢、皿、碗、小坏、砥石など（第５図－１～10・12）が礫に混じって出土した。

３号掘立柱建物（第５図）

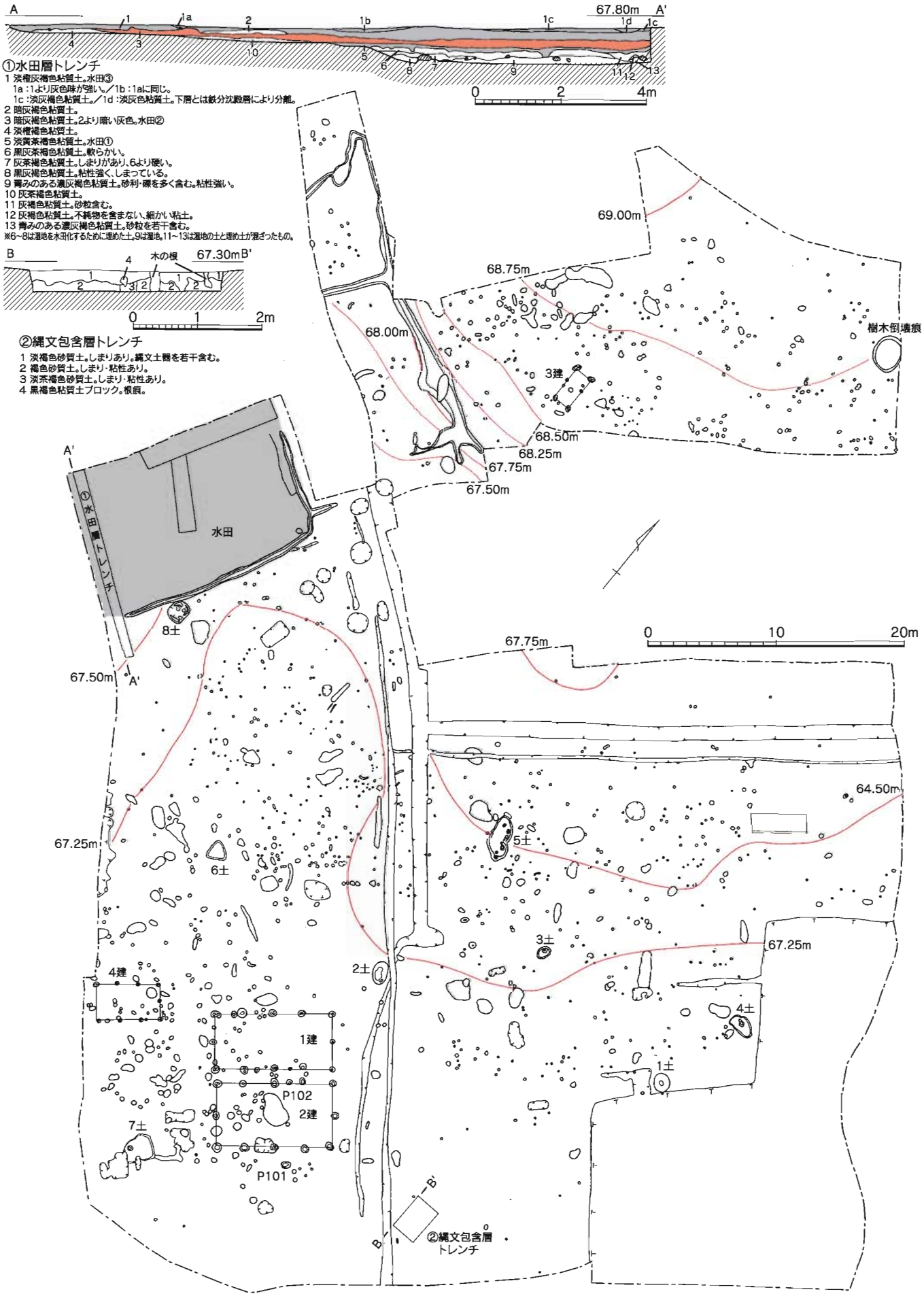
調査区北側の高い場所で確認された建物である。身舎の規模は梁間1間（約1.3m）、桁行２間（約2.9m）を測り、桁行方向の柱間平均は約1.4mとなるが、間の柱穴はやや北寄りにある。延床面積は約4.0㎡で、建物の軸方位はN-6°-Wである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは30～60cmを測り、深さは15～35cmである。柱穴からは遺物の出土はなかった。

４号掘立柱建物（第５図）

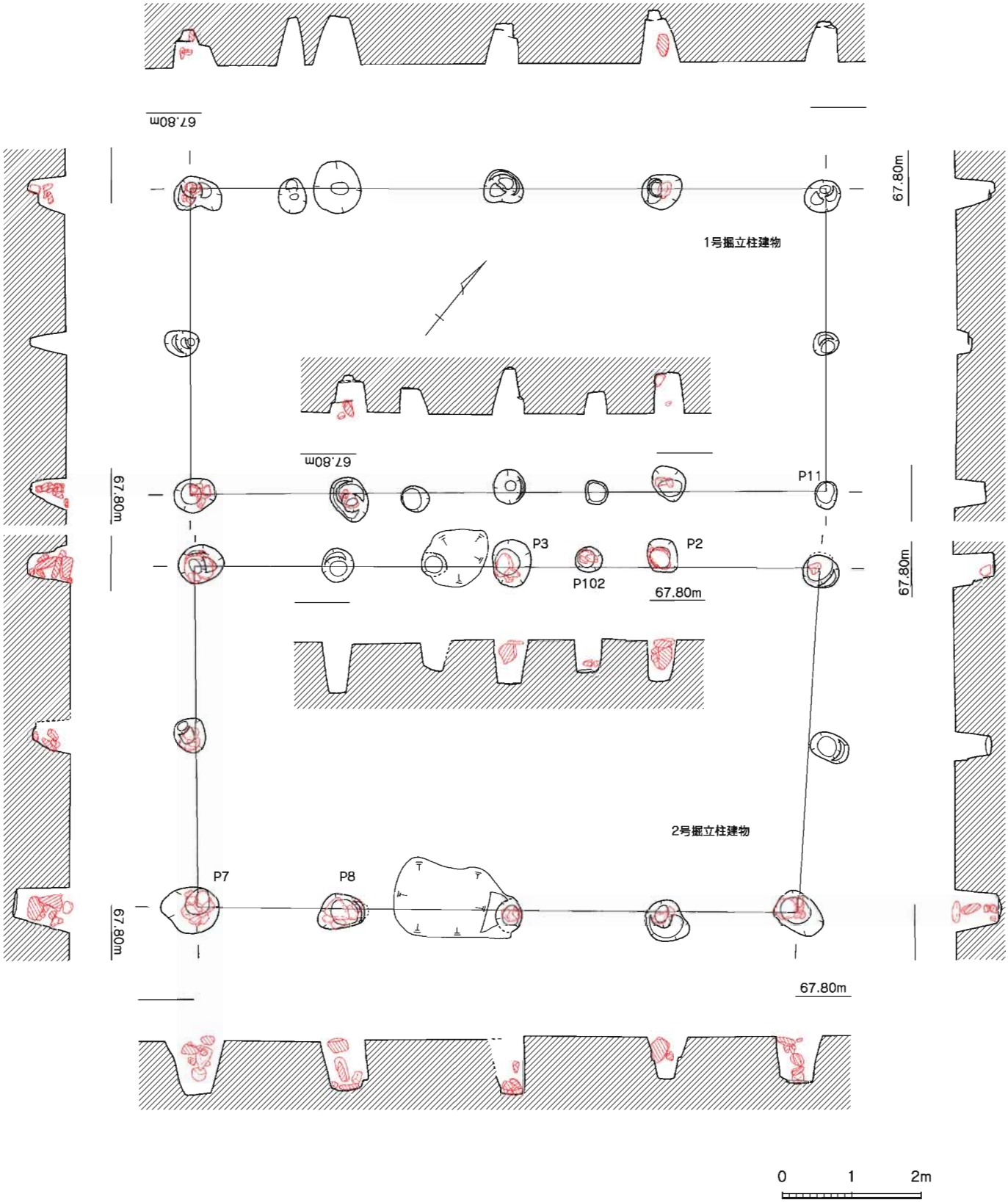
１・２号掘立柱建物の西側で確認された建物である。身舎の規模は梁間２間（約2.8m）、桁行３間（約4.8m）を測り、梁間方向の柱間平均は約1.4m、桁行方向の柱間平均は約1.6mである。延床面積は約13.5㎡で、建物の軸方位はN-49°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは25～40cmを測り、深さは20～45cmである。柱穴からは遺物の出土はなかった。

出土遺物（第５図）

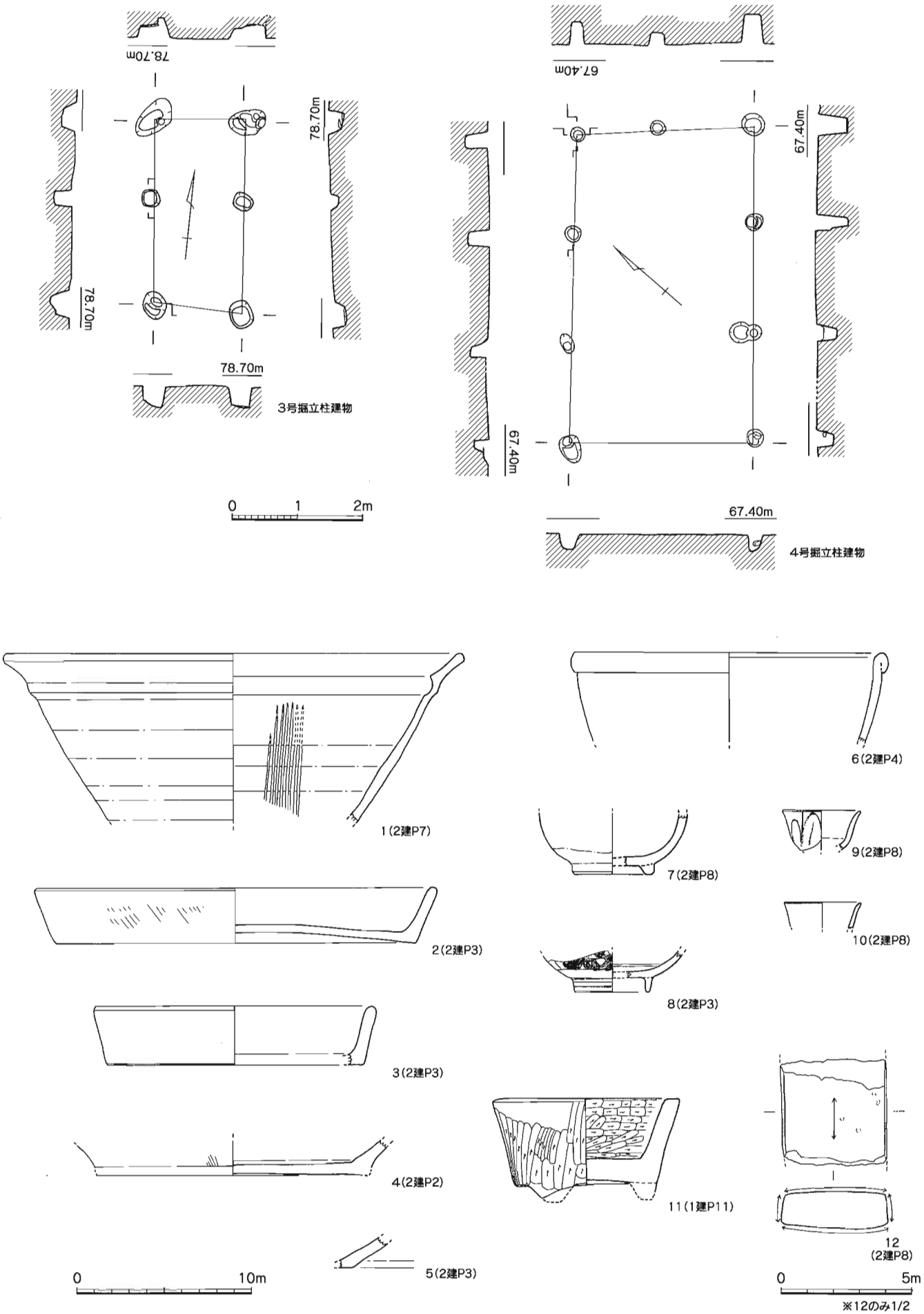
１は擂鉢である。口縁部にのみ鉄釉がかかり、擂目の先端は引きっぱなしである。２～５は瓦質土器の盤状の容器であろう。２・３は外面にタタキ痕が残る。６は陶器の鉢である。７は陶器の碗である。８は染付碗である。内面見込みには二重圏線と文様が描かれ、高台内には「明」銘がある。９・10は染付小坏である。11は土師質の火入である。三足で内面底部は被熱のため赤変している。12は砂岩製の砥石である。上下を欠くが、他の面は４面とも使用されている。



第３図　遺構配置図(1/400)、水田層(1/120)、縄文包含層（1/80）土層図



第４図　１・２号掘立柱建物実測図(1/80)



第５図　３・４号掘立柱建物(1/80)、掘立柱建物出土遺物(1/3・1/2)実測図

（2）土坑

調査区北側の高い部分を除き、全面に点在して８基検出された。おおよそ楕円形のものと不定形を呈するものが見られ、楕円形のものは深く、不定形のものは浅い掘り込み状である。

１号土坑（第６図）

調査区南部で確認され、検出面での規模は長軸約1.4m、短軸約1.2mを測る円形プランを呈し、底面までの深さは約40cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は擂鉢状に立ち上がる。この中からは陶器碗（第７図－１）が出土した。

２号土坑（第６図）

調査区南部で確認され、検出面での規模は長軸約1.6m、短軸約1.1mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。底面には凹凸があり、壁面は南側以外は緩やかに立ち上がる。この中からは内外面ともに黒褐色釉のかかった陶器の碗片が出土しているが、図示できなかった。

３号土坑（第６図）

調査区南部で確認され、検出面での規模は長軸約1.0m、短軸約0.7mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約10cmを測る。底面には長軸約20cm、深さ約10cmのピットが掘り込まれている。壁面は斜めに立ち上がる。この中からは縄文土器が数点出土したが、図示できるものはなかった。

４号土坑（第６図）

調査区南西端で確認され、検出面での規模は長軸約1.7m、短軸約1.2mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約10cmを測る。底面中央には直径約40cm、深さ約15cmのピットが掘り込まれている。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。この中からは縄文土器が１点出土したが、図示できなかった。

５号土坑（第６図）

調査区中央部で確認され、検出面での規模は長軸約3.4m、短軸約1.5mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約10cmを測る。底面には小さなピットや溝状の掘り込みが見られるが、全て浅い。この中からは姫島産黒曜石の剥片が1点出土したが、図示できなかった。

６号土坑（第６図）

調査区中央部で確認され、検出面での規模は一片約1.5mを測る三角形プランを呈し、底面までの深さは約５cmを測る浅い掘り込みである。この中からは陶器の碗（第７図－２）が出土している。

７号土坑（第６図）

調査区南端で確認され、検出面での規模は長軸約2.6m、短軸約2.2mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約10cmを測る浅い掘り込みである。底面には直径約40cm、深さ約10cmのピットが掘り込まれている。この中からは染付碗、陶器の瓶、土鈴（第７図－３・４・８）が出土している。

８号土坑（第６図）

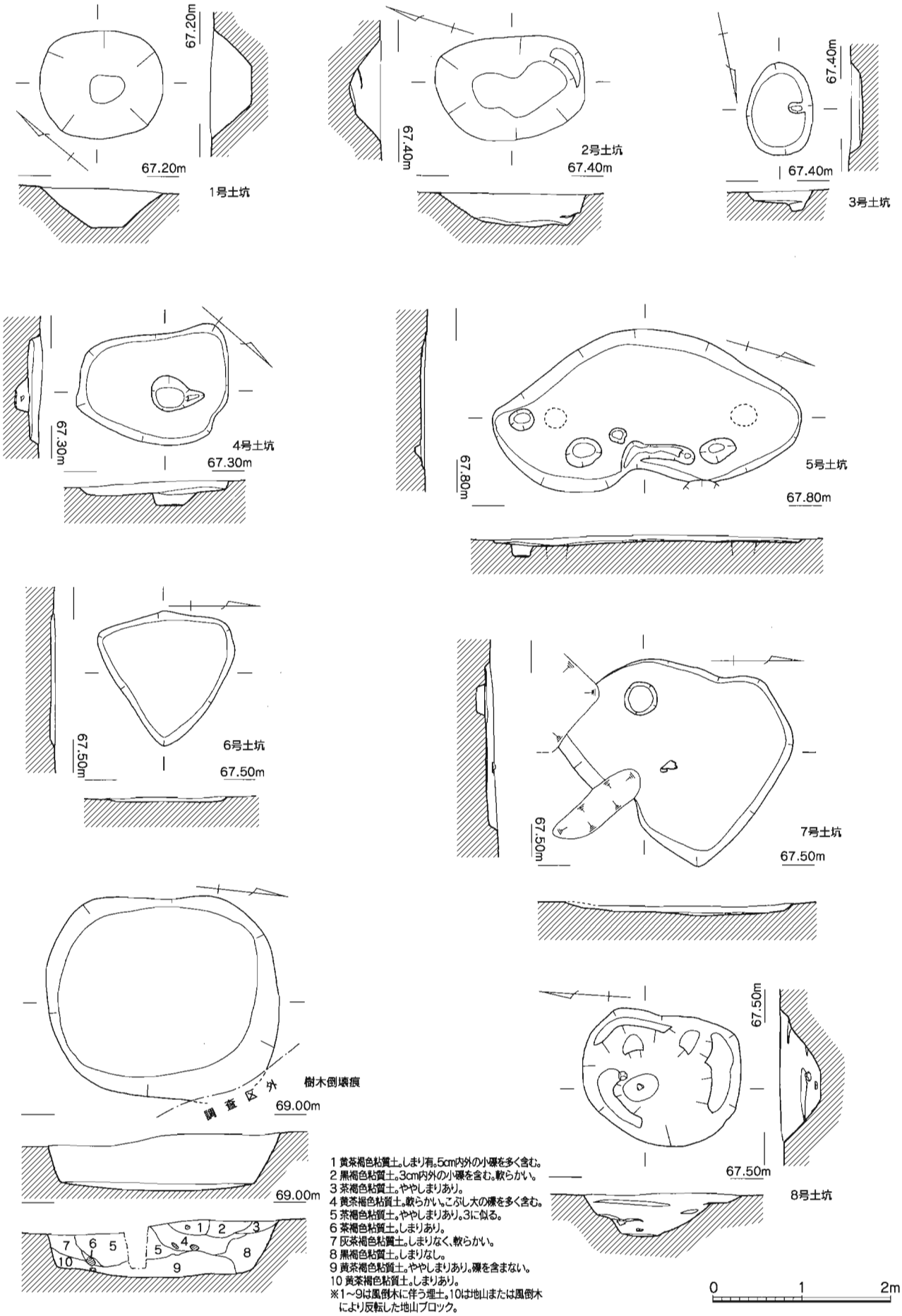
調査区中央部で確認され、検出面での規模は長軸約2.0m、短軸約1.5mを測る円形プランを呈し、底面までの深さは約45cmを測る。壁面は階段状に立ち上がる。この中からは遺物の出土はなかった。

出土遺物（第７図）

１・２は碗の底部である。３は染付碗である。４は瓶の底部と思われる。８は土鈴である。

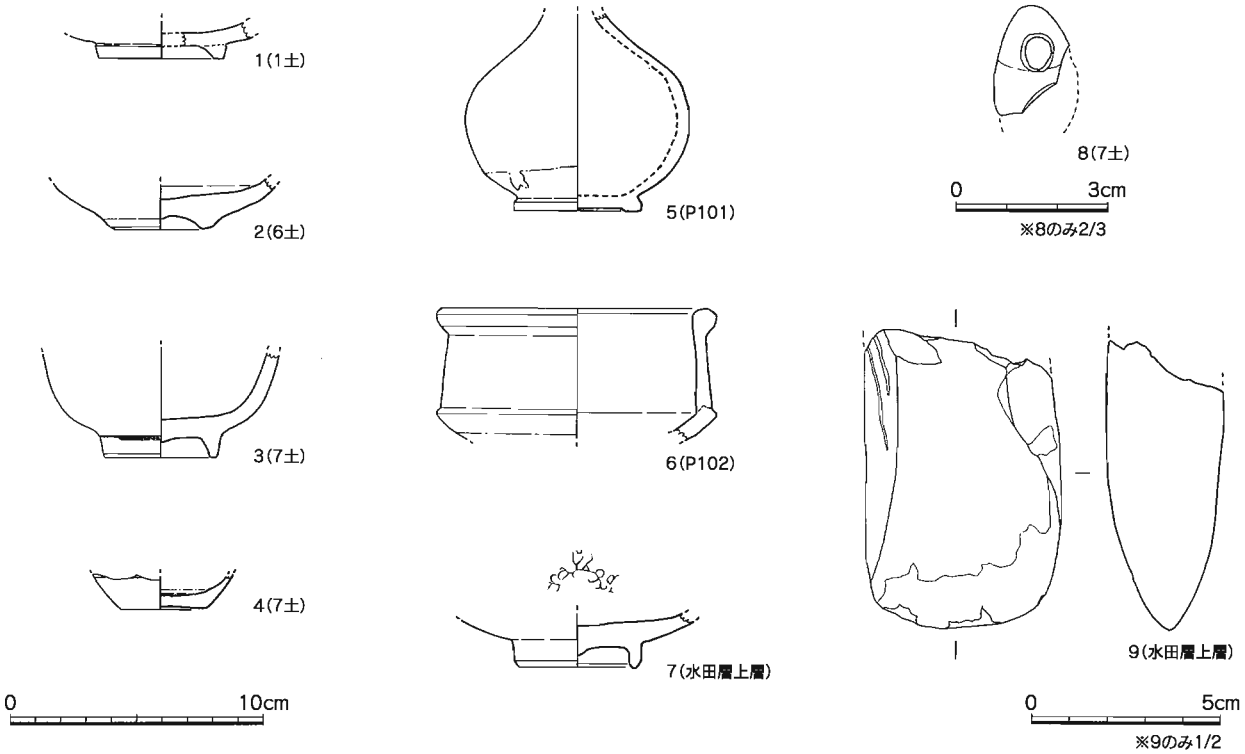
（3）樹木倒壊痕（第6図）

調査区北端の高い場所で確認され、検出面での規模は長軸約2.6m、短軸約2.2mを測る円形プラ



1 黄茶褐色粘質土。しまり有。5cm内外の小礫を多く含む。
2 黒褐色粘質土。3cm内外の小礫を含む。軟らかい。
3 茶褐色粘質土。ややしまりあり。
4 黄茶褐色粘質土。軟らかい。こぶし大の礫を多く含む。
5 茶褐色粘質土。ややしまりあり。3に似る。
6 茶褐色粘質土。しまりあり。
7 灰茶褐色粘質土。しまりなく、軟らかい。
8 黒褐色粘質土。しまりなし。
9 黄茶褐色粘質土。ややしまりあり。礫を含まない。
10 黄茶褐色粘質土。しまりあり。
※1～9は風倒木に伴う埋土。10は地山または風倒木により反転した地山ブロック。

第６図　１～８号土坑・樹木倒壊痕実測図(1/60)



第７図　土坑・ピット・水田層出土遺物実測図（1/3・2/3・1/2）

ンを呈し、底面までの深さは約60cmを測る。底面は皿状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、埋土の堆積状況の観察により樹木倒壊痕と判断した。この中からは遺物の出土はなかった。

（4）水田層（第３図①）

調査区北東端で確認され、検出面での規模は約16m＋α、11m＋αを測る方形を呈し、ごく浅い畦畔状の溝が周囲を縁取る。土質は黒灰褐色粘質土で、調査区の壁際にトレンチを設定し掘り下げたところ第３図①にあるような土層がみられ、もとあった湿地（９層）を造成（６～８層）することで水田として利用されたことが確認できた。なお工事による掘削が水田層までは及ばないことから、検出面での範囲確認とトレンチによる土層確認に留めている。また北側に広がる溝状のものも畦畔である可能性が考えられるが、耕作土等は確認できなかった。上面の遺構検出時に青磁碗（第７図－７）と磨製石斧（第７図－９）が出土している。

水田層出土遺物（第７図）

８は龍泉窯系青磁碗の底部である。内面見込みに花文の彫り込みがある。９は磨製石斧である。基部欠損。

（5）縄文包含層（第3図②）

調査区南部の大肥川に近い部分で地山（淡黄褐色砂質土）中に縄文土器が見られたため、その周辺にトレンチを設定して掘り下げたところ縄文土器が数点出土し、第３図②の縄文包含層の存在が判明した。しかし遺物の密度は低く、詳細は明らかにできなかった。出土した縄文土器も小片で風化が激しく、図示はできなかった。

（6）その他の出土遺物（第７図）

５はP101から出土した陶器の瓶である。６はP102から出土した陶器で、火入と思われる。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では掘立柱建物４棟、土坑８基、樹木倒壊痕1基、水田層、縄文包含層を確認した。

これらの遺構の時期を推定してみると、まず４棟の掘立柱建物のうち１・２号の柱穴からは、抜柱後に廃棄されたような状態で、17世紀後半と思われる陶磁器類が出土している。４号については遺物の出土はなかったものの１・２号と位置的に近接し、軸方向もそろっていることから、１・２号と同時期としてよさそうである。３号からは遺物の出土がなく時期は不明であるが、１・２・４号とは位置も離れ、軸方向も異なっており、他の３棟との関連性は希薄であろう。土坑については８基中３基の土坑から出土した遺物のみ図示しているが、図示不能なものを含めると、縄文時代と近世の遺物が出土している。３・４号土坑出土の縄文土器はともに風化が激しく文様等は不明であるが、胎土および焼成から縄文時代前期～晩期のものとみられ、１・６・７号土坑出土の近世陶磁器は16世紀末～17世紀後半の範疇と捉えられる。樹木倒壊痕からは遺物の出土がなく時期は不明である。水田層上層からは龍泉窯系の文様を持つ明代青磁碗の底部片が出土しており、14世紀後半と考えられる。周辺の試掘調査では中世の遺構・遺物が皆無であるため中世期の様相は不明であるが、湿地を利用した単発的で小規模な水田経営が行われたのであろうか。縄文包含層トレンチからは風化の著しい縄文土器が数点出土し、文様等は不明であるが土坑出土の縄文土器と胎土等が似ており、同時期とみてよさそうである。また調査区内に多数点在するピットのうち、２号掘立柱建物周辺にあるP101・P102から出土した陶磁器も17世紀後半のものと考えられ、この建物および建物群に付随する何らかの施設であろう。

これら中で配置的にまとまりを見せる１・２・４号掘立柱建物に注目すると、まず１・２号掘立柱建物は相接する柱穴列の掘り方の間隔がわずか80cm程度しかなく、調査中は短期間に建替えられた別棟２棟であるか、同時併存の１棟であるか判断ができなかった。しかし、軸方向が全く同じであることや近世民家に関する資料収集から、例えば土間だけの炊事棟と床上居室だけの居住棟を別棟として並び建て、２棟を連繋させて１棟とした分棟型民家のような、１つの建物であった可能性が高いと考えられる。加えて４号掘立柱建物の位置と軸方向の類似性からこれら３棟は同時に存在し、全部あわせて１つの屋敷地であった可能性を示唆する。調査区内での建物群の位置からすれば、屋敷地としてはさらに西側に広がる可能性もある。多少時期は異なるが、近世前期における農家の建物の規模・構成・機能について知ることのできる史料『肥後藩人畜改帳』（寛永10年・1633年）[(1)]によれば、普通の百姓の建物構成は「本屋+釜屋+馬屋+稲蔵」が基本形で、上層農民にはこれに「灰屋・持仏堂・座敷」が加わるとされる[(2)]。本遺跡の１・２号掘立柱建物が本屋と釜屋（が併合した分棟型民家など）であるとすれば、４号は馬屋や稲蔵などの付属棟に比定でき、調査区外にも建物の存在を想起させる。

現在の祝原集落は調査区の西側、国道211号線沿いの斜面に分布し、集落背後の山より流れ出る小河川から取水して、今回の調査区を含む川沿いの低地に水田を営んでいる。今回の調査内容はこの景観がいつ頃成立したのかを暗示する。中世の小規模な水田の経営形態は定かではないが、現水田盤土の直下で掘立柱建物が検出されたことは、建物が廃絶された17世紀後半以降に現在の景観が形成されたことを示すと思われる。水田化の前に建てられ、建替えもなく短期間のうちに廃絶された１つの屋敷の背景を解釈するには至らなかったが、祝原集落の前身である近世祝原村の様相の一端が明らかになったと言えるのではないだろうか。

【註】
（1）「肥後藩人畜改帳」『大日本近世史料』1～4
（2）吉田靖「近世初頭における熊本地方の分棟型民家－肥後人畜改帳による－」『文化財論集』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1983

《参考文献》川村善之『日本民家の造詣　ふるさと・すまい・美の継承』　淡交社　2000
宮澤智士『南国の住まい　日本列島民家の旅①沖縄・九州』INAX　ALBUM　19　INAX　1993
宮澤智士「近世民家の地域的特色」『講座・日本技術の社会史7　建築』　日本評論社　1983
谷沢明『住いと町並み』日本人の生活と文化10　ぎょうせい　1982
稲葉和也・中山繁信『日本人のすまい／住居と生活の歴史』　彰国社　1983
吉田靖監修『民家と町並み』文化財探訪クラブ⑤　山川図書出版　2001　　ほか

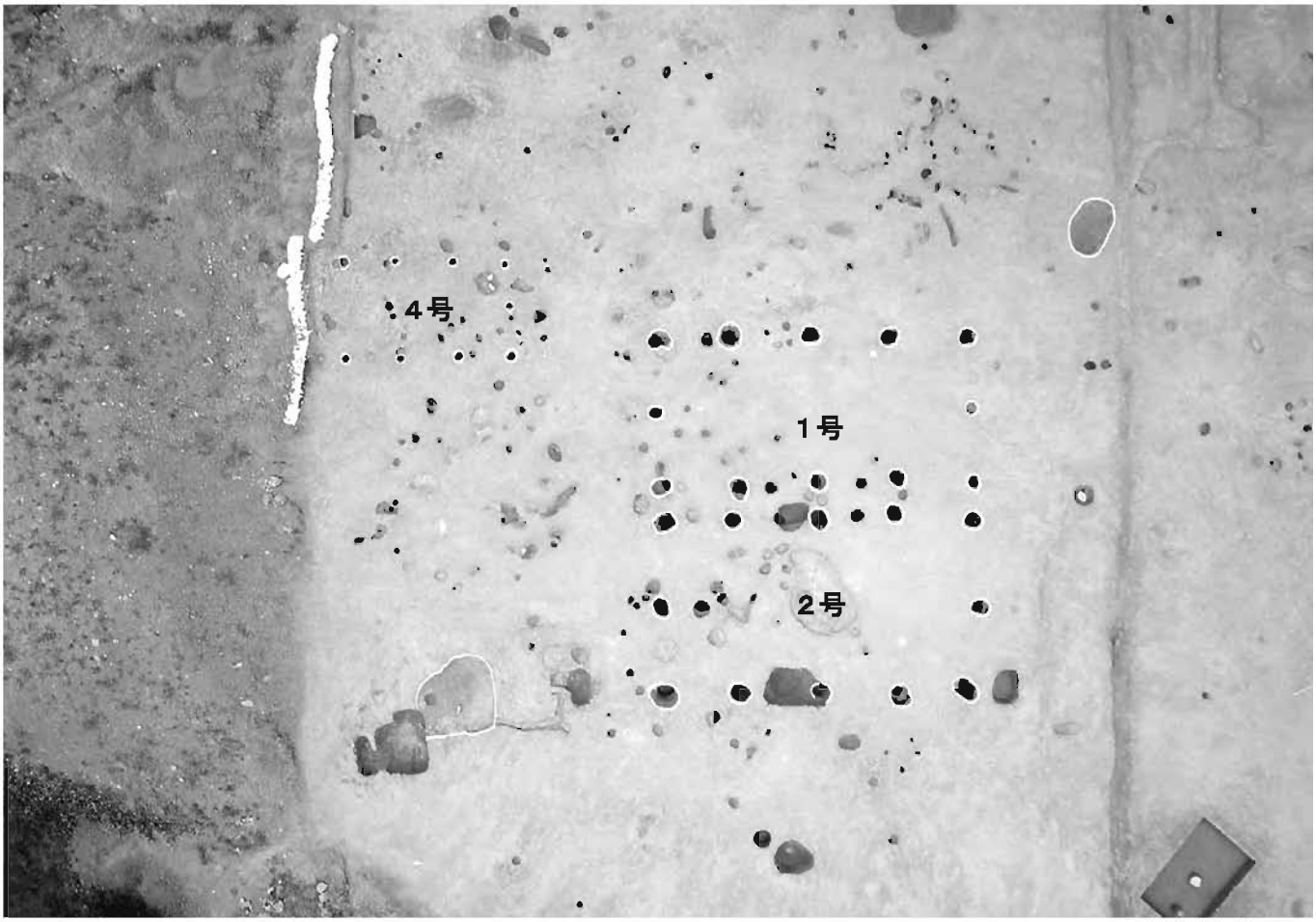
第２表　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第5図-1	2建Ｐ7	陶器	擂鉢	(26.4)	－	－	(9.6)	回転横ナデ	回転横ナデ後スリ目	B	良	紫灰色	紫灰色	口縁部のみ鉄釉がかり。17c後半。肥前系。
第5図-2	2建Ｐ3	瓦質土器	盤？	(23.0)	－	(20.5)	3.1	回転横ナデ	スリ目状のハケ	ABCG	良	灰褐色	灰褐色	体部外面にタタキ様の板目あり
第5図-3	2建Ｐ3	瓦質土器	盤？	(16.2)	－	(14.8)	3.35	回転横ナデ	回転横ナデ	H	良	黒灰色	黒灰色	外面の一部にタタキ痕あり。口縁部内面は白灰色。
第5図-4	2建Ｐ2	瓦質土器	盤？	－	－	(15.6)	(2.0)	回転横ナデ	回転横ナデ	ABG	良	淡灰褐色	淡灰褐色	
第5図-5	2建Ｐ3	瓦質土器	盤？	－	－	－	(1.7)	ナデ	ナデ	ABCG	良	淡灰褐色	淡灰褐色	
第5図-6	2建Ｐ4	陶器	鉢	(18.2)	－	－	(5.3)	鉄釉	鉄釉	H	良	淡灰褐色	淡灰褐色	17c後半。
第5図-7	2建Ｐ8	陶器	碗	－	－	(4.7)	(3.5)	鉄釉	回転横ナデ	B	良	淡褐色	淡灰褐色	外面のみ鉄釉掛かり。
第5図-8	2建Ｐ3	染付	碗	－	－	(4.2)	(2.4)	染付・透明釉	染付・透明釉	－	良	乳白色	乳白色	17c後半。肥前系。内面見込に文様あり。高台内銘(「明」)あり。
第5図-9	2建Ｐ8	染付	小坏	(4.5)	－	－	(2.3)	染付・透明釉	透明釉	－	良	青灰白色	青灰白色	17c後半。肥前系。外面文様あり。
第5図-10	2建Ｐ8	染付	小坏	(4.4)	－	－	(1.4)	染付・透明釉	透明釉	－	良	乳白色	乳白色	
第5図-11	1建Ｐ11	土師質土器	火入	(10.7)	－	8.2	(5.8)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ABC	良	淡灰褐色	淡灰褐色	三足
第7図-1	1号土坑	陶器	碗	－	－	(5.0)	(1.5)	不明	灰釉	E	良	淡褐色	緑灰色	
第7図-2	6号土坑	陶器	碗	－	－	4.2	(1.8)	灰釉	灰釉	B	良	淡茶灰色	淡茶灰色	内面見込重ね積み痕あり。高台見込に兜巾あり。16c末～17c前半。
第7図-3	7号土坑	染付	碗	－	－	(4.4)	(4.1)	染付・透明釉	透明釉	－	良	青白色	青白色	高台脇に一重圏線あり。高台見込に兜巾あり。
第7図-4	7号土坑	陶器	瓶	－	－	3.3	1.3	鉄釉	横ナデ	B	良	淡灰褐色	淡灰褐色	底部糸切り。
第7図-5	Ｐ101	陶器	瓶	－	9.0	5.0	(7.8)	緑色釉	緑色釉	B	良	暗茶褐色	不明	内面にも全体に施釉。
第7図-6	Ｐ102	陶器	火入	(11.0)	－	－	(5.2)	白刷毛目後緑色釉	回転横ナデ	E	良	淡褐色	淡褐色	釉薬は口縁部～外面上半。
第7図-7	水田層上層	青磁	碗	－	－	(5.0)	(2.1)	緑灰色釉	緑灰色釉	－	良	緑灰色	緑灰色	龍泉窯系。内面見込に花文あり。
第7図-8	7号土坑	土製品	土鈴	－	－	－	(2.2)	ナデ	手づくね	D	良	淡褐色	淡褐色	上部のみ

第３表　出土石器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				備考
				長さ	最大幅	厚さ	重さ（g）	
第5図-12	2建Ｐ8-1	砂岩	砥石	(4.1)	4.1	1.5	(44.2)	淡赤褐色。4面使用。上下欠損
第7図-9	水田層上層	砂岩	磨製石斧	(7.6)	5.1	3.1	(183.8)	基部欠損

写真図版１



１・２・４号掘立柱建物

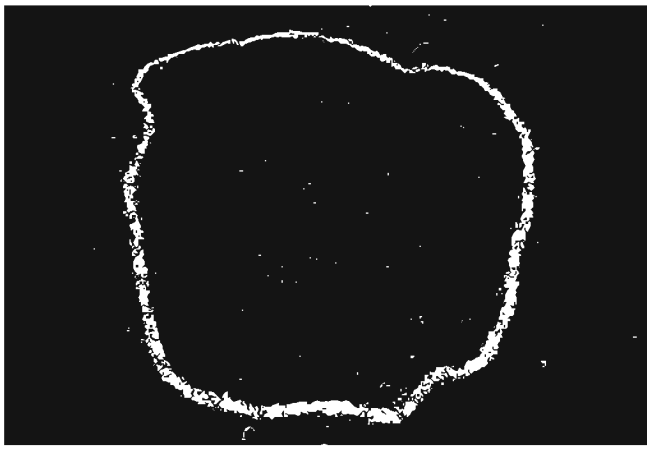
１号掘立柱建物P11遺物出土状況

３号掘立柱建物

１号土坑

２号土坑

３号土坑



４号土坑

５号土坑

７号土坑

８号土坑

樹木倒壊痕

水田層土層

縄文トレンチ土層

写真図版３

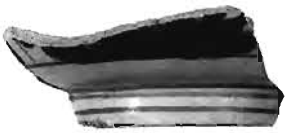
5-1(2建Ｐ7)

5-2(2建Ｐ3)

5-2(2建Ｐ3)

5-4(2建Ｐ2)

5-7(2建Ｐ8)



5-8(2建Ｐ3)

5-8(2建Ｐ3)

5-9(2建Ｐ8)

5-11(1建Ｐ11)

5-11(1建Ｐ11)

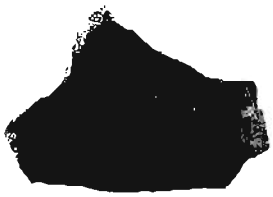
7-2(6土)

7-3(7土)

7-4(7土)

7-4(7土)

7-5(Ｐ101)



7-7(水田層)

7-7(水田層)

7-8(7土)

※数字番号は挿図番号に対応する。

報　告　書　抄　録

ふりがな	いわいばるいせき
書名	祝原遺跡
副書名	－
巻次	－
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第61集
編著者名	行時　桂子
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2005年10月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		地町村	遺跡番号					
祝原遺跡	大分県日田市 大字夜明字 祝原1862-1他	44204-6	651144	33°19′26″	130°52′06″	20030509 ～20030805	4,500㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
祝原遺跡	集落跡	縄文 中世 近世	縄文包含層 中世水田層 掘立柱建物跡　４棟 土坑　８基 ピット	縄文土器・青磁 染付・瓦質土器 陶器・土鈴 磨製石斧・砥石	

祝　原　遺　跡

2005年10月31日

編　集　日田市教育委員会 文化財保護課
〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1

発　行　日田市教育委員会
〒877-8601　大分県日田市田島2-6-1

印　刷　山本印刷有限会社
〒877-0059　大分県日田市大日町3986-3